

小田原史談

第59号

発行所 小田原史談会
小田原市内 6-1
郷土文化館

釜戸跡発掘当日の状態

加藤 誠 夫

足柄地方を通過する東名道

路建設途上突然松田町庶子

の山麓切崩し作業中、思い

も依りなかつた所にポッカ

リと穴が明いて、然かも、

中に布目瓦が沢山はいって

いた。

其の敷三ヶ所、但し始めの

二ヶ所は何も知らない工事

人の破壊する所となり、調

査は全々出来なかつたので

ある。

其の後、昭和四十四年七月

二十二日(火)の晴れ上っ

た日、小田原市教育委員会

文化財保護委員長中野敬次

郎氏より、電話にて、今松

田町庶子と云う所で、県の

委員赤星直忠博士が、目下

調査発掘中だから、一緒に

見に行きませんか、とのこ

とで、早速出掛ける事とし

た。

小田原市から、中野先生と

松野市職員の名、小生も

共に同遺蹟に赤星博士を尋

ねた。

当日は、快晴で大変暑かっ

た中を、博士指導の元に数

名の学生が泥まみれで作業

を続行していたのである。

先生と私は博士と或るトン

ネルの日影に腰をおろし、

松田町役場の吏員の方々と

共に今日迄の経過及び特色

等知り得た全すべてのお話を

聞いた。先づ其の特色とし

ては、

一、今迄不明であった釜

戸の前に、ある広さ

をもった前庭が確認

された事。

二、階段状に自然の山腹

に斜めに掘り、其の

頂上に煙突の穴、直

径十三程が垂直に掘

りぬかれている。

三、階段上には一面に布

目瓦を敷きつめた様

になっている。

四、焚口の手前左側から

完全なる復弁の蓮華

紋様を施した、鍔古

瓦一個が出土した事

五、此の古瓦に交って軒

先平瓦、重孤紋様の

破片が出土した事。

以上の要点を聞き取り

後、発掘現場を見たのであ

る。

先づ珍らしかったのは、地

山の頂上に口を明けている

煙突が見られたから、私は

特に、古代人は面白い事を

して、合理化する事を考へ

た物だと思つて、其の頃の

人の奇智を高く評価した。

それに続いて下へ傾斜角約

四十五度の昇り状の穴を掘



昇り釜戸内部の階段と其の上の衣目瓦片



釜戸入口を正面より見る

りぬき、然かも一ツツ丁
竈にも、自然の赤岩を約十
五程の高さに何段も掘って
あった。其処には博士の話
した通り、昔のまゝに掘り
出されたまゝで、布目の古
瓦片が一面に並べられた様
段の上に敷きつめられてい
た。其の天井は、焼けこげ
て真黒なすゝが其のまゝお
おっている。一番下が焚口
で、其処では、丸い形に穴
が掘られ、床の表面を見る
と、長四角状に造られてい
て、其の周囲の赤岩は、相
当な火力の為に特に赤褐色
を呈していた。

博士に依れば、此の床面の
西南端から軒先鍔瓦が発見
されたのである。此の床は、
前庭の床面より約三十程程
深く掘り下げてあった。此
れから東方向きに前庭の床
面が約六坪位の広さで、扇
状に開き、先端部で、下の
沢に向つていている。急斜面の
巨巖約三十米強の芝山がひ
ろがり、沢は、其処に北西
の山地から東南の方向に流
下し、酒匂川に向つて流れ
ている。此の川の傾斜角は
約十五度は有ると思われる
其処で私は、此れ等の諸点
を見終つてから、尙博士等
と話している内に、此の布
目瓦の中に、今迄小田原市
千代台の仏跡から発見され
た布目瓦と比較した場合、
千代台発見の布目瓦と非常
に類似した実例として三例
ある事を確認した。此の三
例類似の古代瓦及び、鍔瓦
と、重孤紋様をもつ軒先平
瓦の破片等の確認によつて
松田町庶子の遺蹟は千代台
の古代廃寺遺蹟に關係があ
る釜戸跡の遺蹟だと考へつ
いた。

此の千代台廃寺跡遺蹟に関
する報告は、昭和十八年十
二月一日発行の「相模飯泉
編音」第二巻第十二号誌、
神奈川県郷土研究会発表の
冊子で報告してあるから御
参照下さい。

其の昔、足柄地方は、奈良
の都からはるか東方の草深
い所だと考へられていたの
(以下二P上欄)

だったが、当時すでに、大伴の物部の人々が住んで、嘗々と水田耕作に一生を打ち込んで暮らしている。此の頃には、中五拾戸田一百六拾七町、皇后宮食封、又別に、舍人親王食封百五拾七戸、田三百六拾七町等と中央の記録にはある。

先づ曾我中村の郷には、當時すでに、南谷山盧尊寺を僧行基が開創したと言われ、又千代合には、物部の弓削氏が一族を挙げて、千葉山弓削寺が建造されたと、今の飯泉山勝福寺にある縁起に書き残されている。

弓削寺は奈良朝の末期の頃、孝謙天皇の念持仏なる観音像を安置供養した旧蹟でもあった。先年千代台遺蹟の発掘調査をした際には、おびたしい布目古瓦片や蓮華弁のある軒先に付ける丸瓦や重孤紋縁其の他の平瓦に供なつて、仏像の螺髪六個と胸飾用菊花型裝飾品や古瓦磨断片等々多数の資料が発見されて世間をさわがせたが、此れ等の遺物から見て、松田町庶子発見の古瓦との関係が特に注目されるのである。

古代に在っては其の政治形態は今の様ではなく、松田

町も千代も同一の文化圏を形造つて居たのだろう。次から次へものゝ考へが発展して行つた時、赤星博士が、どうかこれだけは保存して下さいと申されて、焼けこげた土塊を指して、これは天井の岩だとのことであつたので、大きなけずり跡のある赤褐色の土塊を小

田原市の参考資料として持参し、郷土館に納めた。本日の見学は全くすばらしく、未知の発見でもあり、足柄の古代研究に関して忘れられない良い発見だ。た事をいくどもくもくりかへし考へ乍ら博士に別れを告げて家路についたのであ

左 赤星直忠博士と 右 中野敬次郎先生



釜戸の頂上にあけられた地山の煙突



小田原市の新指定文化財について (後篇)

中野 敬次郎

（旧紀伊神社の木碗（轆轤製楠白木碗）二個

紀伊神社は早川七番地であつて、昔は紀伊大権現、木宮大権現など呼んで木地挽業（轆轤業）の祖神とあがめられる惟喬親王を奉祀した神社で、古くから早川村の氏神であつた。

早川村は平安、鎌倉時代に存在した早川荘の首邑で、ここに古く木地挽業が起り木地師の集団定住したところであつた。恐らくこれらの業者が祖神を奉祀したので紀伊宮大権現で、今も神社附近を地名で木地挽と呼んでいるのである。

この木地挽は、木地挽業者達が業神に彼等の作品を奉納したものと推察され、昔から社宝として伝承してきたものである。大、中、小の三個一組になつて保存されてきたが、小は破損して原形が崩れているので指定の対象からはづし、大、中二個を指定した。

大は口径一九・四センチ、高さ一一・六センチ、中は

口径一七・三センチ、高さ一〇・〇センチある。

中碗は通常の汁椀であるが大碗はやや技巧がほどこきれてあつて、少しまくれ気味の口縁があり、ふくらみの外側に三本の彫線がついているし、合が大きく高い飯碗なのであろう。二個とも蓋はない。

作風は素朴でやいびつにつ出来ているのは、原始的な轆轤によって製作されたことを示しているが、祭器として神前に奉納したものであるためか、漆をかけず、白木のままで磨きもかかっていないが、木地目が美しくあらわれていて一種の風格を見せている。

しかし、虫食がかなりすすんでいて、中碗の口縁が老退化のために欠けがあるので、今後の保存法に考慮を要する。

現在小田原地方に残る木碗の最も古いものとして珍重される。

（光照寺のヒイラギ（櫛木天然記念物）一株

光照寺は鴨宮七五三番地にある浄土宗の寺院である。

鴨宮にはもと西光寺、東照寺の二寺があつたが、ともに浄土宗であつて明治六年に一旦廢寺となつたが、その後村民の力によつて西光寺跡に堂宇を建立し、旧二寺合併の意味で光照寺と名付けた。そして明治四十年に旧東照寺跡の現在地に移されたのである。

このヒイラギ（栂）の巨木は光照寺堂前の稲荷社の側にある。目連幹囲三メートル、根本周囲四・二メートル、樹高一〇メートルあり樹勢おう盛で、四方に枝を張り樹冠一〇メートルに広がっている。秋の開花期には白い小花が樹冠一ぱいに咲いて見事であり、芳しい香気を放つが、結実しないから雄樹であらう。この地に旧東照寺が建立された初めは寛永七年（一六三〇）で、その時から稲荷山東照寺と呼んだのであるから、

稲荷社はそれより以前からあつたものと想像されるが

この杉樹はその頃からあつたもので、里人は稻荷山の御神木として保存して来たのだから、樹齡は約三、四百年のものとして推定される。

曾我氏に付いて

——曾我氏系図継の検討——

内田 武雄

小田原市下曾我に曾我兄弟で有名な曾我氏がある。曾我氏の系図に付いては多くの学者の間でぎもんももたれてきた、しかし曾我氏の起に付いては左のとおりである。

宗我神社の起り(宗我神社縁記)

そもそも曾我郷総鎮守宗我神社と申奉る。人皇八代孝元天皇の皇子彦太忍信命の御子、屋主忍男武推心命其御子武内宿弥、其御子、宗我石川宿弥命其子、宗我都比古命にして、右五世の孫なり比御神大和高市郡宗我郷にて武内宿弥命始に宗我姓を賜う由御孫宗我都比古命、同所に生まして生長なしたもふ、随ひ御心御か

しこく御勢い強くおわししますによりて時の天皇よりみことありて東夷のしづめとして、此相模国足柄郡へ下り給ふ御神当国へ下向うまします此里を開かれ常磐堅磐に御柱太敷立て任せ給ふ御代の内は東夷のわざわいなくよく治りて一百年の壽ぎを保ち終り神去りましたことなり。

この記録の宗我氏が現在のいたったとは私は考へられないそれは曾我氏は関東八平氏の一人と言われ鎌倉の村岡五郎良文の七世の孫と言われており、曾我の大夫祐家初めて曾我に住むとなつてゐる。

私考によれば曾我の祐家とは河津の祐家であるこの人が宗我氏にかわつて、曾我の領主となつたのだらうと思われ。

最近発見の文書に曾我氏は祐信の代に地名をも曾我家(早世)その子に祐親があり祐親の弟に祐清がある其子に祐信があるので、曾我物語に出てくる曾我の祐清とは河津の祐清とも思われる。

伊東系図には祐家はないが相良系図には祐家は伊東次郎工藤大夫となつてゐる。祐清は伊東九郎(河津九郎)とも言われ寿永二年(一一八三)討死となつてゐる伊東の祐親の子が河津三郎祐泰で祐泰の子が曾我兄弟であるから曾我氏は祐家が初代で、伊豆の伊東にいたのだらうが祐家早世、祐清討死、祐信の代になつて初めて曾我の城主と成つたものと思われ。

片浦史跡めぐり

鹿島踊り
神前に白の行衣をひるがへし灼熱ものかわ鹿島の囃。天正庵
秀吉が風雅の道に訪れし天正庵のこれなる庭石。
根府川関跡
松平伊豆の守の逸話ありと聞けど根府川関のあとかたもなし。
石橋山古戰場
ねじり畑の社も古りて松一本海よりの風武興を語ろう
佐奈田靈社
功績を煥然と語れる靈社に与一の散華を今宵たり。
熱海街道
人車より軽鉄軌道に変遷を重ねて来て過去の道なつかしむ。

人皇六十九代後一条天皇御宇長元元年戊辰十一月中大和高市郡宗我郷惣鎮守なる延喜式内官幣大社宗我都比古神社の神官宗我播磨守保度社職を子息保頼に譲り其身は当所に下り先祖宗我都比古命の御墓を置きて

足柄下郡史によると河津祐

河津九郎(寿永二年(一一八三)討死、祐清の子に祐信河津三郎この祐信が曾我祐信になつたのではないかと思われ。

伊東系図ではこのようになる。祐泰の弟の祐清伊東九郎(河津九郎)寿永二年(一一八三)討死、祐清の子に祐信河津三郎この祐信が曾我祐信になつたのではないかと思われ。

伊東次郎、工藤大夫(相良系図)

河津二郎 伊東次郎入道寂心

伊東五郎

河津三郎

祐家 河津系図には祐家なし

祐親

自殺

祐真

弟 祐

泰 安元二年 殺さる

天折久津見入道実運

河津で成長後伊東に移る

治承四石橋山討死

又祐重・祐通とも言う

ことしの行事

昭和四十六年度事業計画

- 会報 年五回発行(五、七、九、十一、一の各月)
- 特集号 年一回発行(五月)
- 史跡めぐり 市内二回
- 史跡めぐり 市外三回
- 講演会 現地集合
- 研究会 一夜城、小田原城
- 募前祭 五月、香沼姫、傘焼祭
- 七月、北条墓前祭
- 八月、早雲寺墓前祭
- 九月、久野古墳祭
- 九月、尊徳祭
- 十一月、幻庵祭

地区会

年二回

四六年度役員

過日の理事会に於て四六年度役員の変更が行なわれつぎの人々が選ばれ、三月二十八日の総会で決定しました。

新役員の名簿

- 会長 中野敏次郎
- 副会長 山崎益太郎
- 松本 孝作
- 香川 政治
- 事務局長 右同人兼務
- なお新参与に
- 市川 博 川瀬岩次郎
- の両氏が、又新理事に
- 小倉義己 沖山敏子

- 杉山安太郎 市川邦雄
- 鈴木平八 三橋正四郎
- 松岡俊子 曾我貞次郎
- 徳坂行雄 中島慶太郎
- の各氏が。
- 編集委員に
- 立木望隆 内田武雄
- の両氏が就任しました。

御苦勞様でした

旧役員

- 副会長 加藤誠夫
- 理事 岩田忠介
- 井上宗 小西哲夫
- 神田太郎吉 富田兼吉
- の各氏。

会のごき

※四月十日、定例会が中央公民館で行なわれ、小田原市文化財保護委員杉山幾一氏の古代の小田原と題しての卓話があった。

※四月二十日、北条香沼姫墓前祭が行なわれ本会から拾数名が参加した。

※五月十二日、定例会が中央公民館で行なわれ、旧桶町郷土史研究家竹見龍雄氏の中村郷についてと題しての卓話があった。

同日の理事会で新旧理事の承認と曾我兄弟遺跡めぐりが決定した。

※五月二十八日、曾我傘焼祭りに本会から拾数名が参加、盛会であった。

※五月三十日、当会主催曾我兄弟遺跡めぐり(白糸の滝、花鳥山脈方面)が行なわれ百拾名が参加、天候にも恵まれ盛会であった。

※六月六日、豆相史談会第十六回総会が伊豆地方北部の史跡めぐりを兼ねて静岡県中伊豆荘で行なわれ、本会理事立木望隆氏の「早雲駿河下向の問題」、喜多川竜男氏の「箱根用水」と云う研究講演があった。本会の参加者は二十三名。

※六月十日、定例会が中央公民館で行なわれ、清水専吉郎氏の「小田原の歌人について」と題しての卓話があった。

※本会理事立木望隆氏多年の研究による著書「北条早雲素生考」の出版記念祝賀会は来る六月二十日(日)午後一時三十分より小田原商工会議所会館で行なわれます。

義民下田隼人翁

加藤誠夫 著

下田隼人(はやと)は、江戸時代の初めに、小田原藩の圧制にたいして、農民を救うために起ちあがり、ついに目的を達したあと、

法に準じた義人であり、その人の家系図、その社会背景と、事蹟をくわしくのべたのが本書であります(領価一、〇〇〇円)

北条早雲素生考

立木望隆 著

戦国時代前記の英雄として有名な北条早雲の謎を解明し、はじめて世に問う注目の研究書。

早雲には系図上の父が数人、生れた国も数カ国といわれ、四十半ばまでのことは一切不明であった。

著者は、京都、宇治、伊勢、岡山とくまなく歩き廻って、その謎にいどんだ。

夏(領価、会員にかぎり二、〇〇〇円)

予告

毎月十日(午後一時半)は史談会の定例会です。その際卓話が行なわれます。七月十日

事務所の移転

小田原史談会の事務所は、こんど「郷土文化館」が城内常盤木門内に移転したの

あとがき

※新年度第一号を遅ればせながらお送りします。いろいろな事情で一カ月も遅れたことを、重々お詫びいたします。

※従いまして、第二号は七月中旬に発行いたしますので、どしどし原稿をお寄せ下さいませよう。

※史談会にふさわしいお話が、皆さんのそばに沢山ころがっていると思えます。

※原稿は、四百字詰で、正しく書いて下さい。それ以外ですと没になる場合もあります。

(立木・内田)